

ゼカリヤ書5章4節 「家の中の汚れ」

1A まことの宮の前の偽の宮

1B 二人の証人

2B イエスの宮清め

3B 呪われたいちじくの木

4B 神殿破壊

2A 神の家から始まる裁き

1B 賢い建築家

2B 砂の上の家

3B 釣り合わぬ頸木

4B 自己吟味

本文

ゼカリヤ書 5 章を開いてください、私たちの学びは先週で、ゼカリヤ書 4 章まで来ました。今日は午後礼拝で、5-6 章を一節ずつ読みます。今朝は、5 章 4 節に注目します。「4 **わたしが、それを出て行かせる。…万軍の主の御告げ。…それは、盗人の家にはいり、また、わたしの名を使って偽りの誓いを立てる者の家にはいり、その家の真中にとどまり、その家を梁と石とともに絶ち滅ぼす。**」

私たちは、ゼカリヤが連続して見ている幻を読んでいます、ここの箇所は、巻き物が飛んでいるところを、ゼカリヤが見ています。彼もびっくりしているようです。そして、その巻き物は、巻いてなく、広げられた形で飛んでいます。そこには、神の十戒など、戒め、命令、教えが書いてあります。神の言葉が、全地に対して語られた感じにあります。その時に、盗む者、偽る者などは取り除かれるとあります。そのようなことをやっている家は、その家が絶ち滅ぼされる、と言っているのです。

なぜ家が出て来るのか？それには、二つの意味合いがあると思います。一つは、そこにはつながりがあります。家ですから、そこに住んでいる人々には親しい関係があり、共同体意識があります。それは、神の与えられた尊い絆ではありますが、それゆえ、悪がその中で行われたら、全体に広がってしまいます。全ての人がそれを行なっている訳ではなくとも、それを行なっているのを見ぬふりをするし、正当化しさえします。もう一つの家の意味は、隠れて行なうということです。家は、とてもほっとする場所、気の抜くことのできる場所です。ゆえに、公の、人の見えるところでは行わないことも、家の中で隠れて行なうことがあります。主は、そうしたところにもご自分の言葉を語り、それで裁かれます。そして、この裁きの厳しさは、その家全体が破壊されることです。家の中にある一部を取り除くには、あまりにも隠れられていて、出てこないこと。あるいは、その家、共

同体の中で複雑に絡み合っているのであれば、その家全体を滅ぼすしかなくなります。

1A まことの宮の前の偽の宮

1B 二人の証人

私たちは、先週、ゼカリヤ書 4 章の学びにおいて、神殿の再建において二人の指導者、ヨシュアとゼカリヤが証し人として立っているところを読みました。ヨシュアが、汚れた服を着ている所を清められて、礼服を着て、神の宮で仕えることができるようになりました。そしてゼルバベルは、主の御霊によって、困難な、山のように立ちはだかる問題を、御霊が平地のようにしてくださいます。彼らがこのようにして、神殿建設において指揮を執る時に、主の力強い証しを立てるわけです。

けれども、黙示録 11 章を読みますと、終わりの日に、彼らのような証し人が、偽の神殿の前に現れることが預言されています。主イエスご自身が神の家を建てられるのですが、その前に、偽のキリストによって建てられる神殿があります。ダニエルが預言した、荒らす憎むべき者がいけにえをやめさせるところの、神殿です。その神殿の前で、二人の証人が預言を行ないます（黙示 11:3-6）。預言をすると、雨が降らなくなったり、水を血に変えたり、あらゆる災害をもたらす力を持っていました。なぜ、彼らはそのような災いをもたらす預言を行なったのでしょうか？それが、エルサレムが、「霊的な理解ではソドムやエジプトと呼ばれる大きな都(11:8)」と呼ばれているからです。神殿が建てられているのに、エルサレムは、ソドムやエジプトのように退廃していました。神殿だけ建っていても、そこで正義や憐れみが行なわれていないのであれば、それは偽物です。それで、二人の証人は、これは偽物の神殿であり、あなたがたがまことの神殿の出入りができるようにするため、悔い改めなさいということを語っていたのだと思います。

神殿を建てたソロモンが詩篇で、このように歌いました。「127:1 主が家を建てるのでなければ、建てる者の働きはむなし。主が町を守るのでなければ、守る者の見張りはむなし。」主ではなく、もし人が自分たちの思いで、自分たちの考えで物事を進めたところで、それは虚しいのだと言いました。彼の建てた神殿はさぞかし栄華に富んでいたのですが、しかし、そこに人の手を見るだけで、主の手を見ないのであれば虚しいということです。まことの神殿が、偽る神殿に成り下がってしまいます。

2B イエスの宮清め

主ご自身が、二人の証人のように神殿に対峙されたことがありました。有名な、宮清めであります。「マタイ 21:12-13 それから、イエスは宮にはいって、宮の中で売り買いする者たちをみな追い出し、両替人の台や、鳩を売る者たちの腰掛けを倒された。そして彼らに言われた。「『わたしの家は祈りの家と呼ばれる。』と書いてある。それなのに、あなたがたはそれを強盗の巣にしている。」祈りのための家でなければいけないと言われていました。ところが、そこで両替人がおり、また鳩を売る者たちがいました。そして、その利益を求める者たちが集まっている強盗の巣になっている

と、イエス様は断じたのです。祈りの家でなければいけないのです。私たちが祈りを忘れ、もし、計算的なことが優先したのであれば、神の家だと呼んでも、宮清めを受けるような状態になります。

3B 呪われたいちじくの木

そしてイエス様は、そのことを暗示するような形で、いちじくの木を呪われました。「マルコ 11:13-14 葉の茂ったいちじくの木が遠くに見えたので、それに何かありはしないかと見に行かれたが、そこに来ると、葉のほかは何もないのに気づかれた。いちじくのなる季節ではなかったからである。イエスは、その木に向かって言われた。「今後、いつまでも、だれもおまえの実を食べることのないように。」弟子たちはこれを聞いていた。」そして、宮清めを行なわれた後に、ここを再び通りかかったら、いちじくの木が根まで枯れていました。それは、このいちじくの木が神殿を表していたからです。見た目は華やかに見えました。葉は生い茂っているのです。けれども、肝心の実が結ばれていませんでした。ですから、実を結ぶための木であるのに、葉だけ生い茂らせても意味がありません。それでイエス様は呪われたのです。ユダヤ人の神殿生活を象徴している出来事でした。

イエス様は、実を結ばせることに関心を寄せておられます。「ヨハネ 15:5-6 わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。だれでも、もしわたしにとどまっていなければ、枝のように投げ捨てられて、枯れます。人々はそれを寄せ集めて火に投げ込むので、それは燃えてしまいます。」私たちが救われたのは、良い行いを行なうためであり、神がその行ないまでも予め備えておられると約束しておられます。したがって、私たちがただ、イエス様に自分の生活の主導権を明け渡しさえすれば、主は必ず実を結ばせてくださいます。

4B 神殿破壊

そして、イエス様は事実、ユダヤ人の神殿がローマによって破壊されることを、生々しく預言されたのです。「マタイ 24:1-2 イエスが宮を出て行かれるとき、弟子たちが近寄って来て、イエスに宮の建物をさし示した。そこで、イエスは彼らに答えて言われた。「このすべての物に目をみはっているでしょう。まことに、あなたがたに告げます。ここでは、石がくずされずに、積まれたまま残ることは決してありません。」ユダヤ人の家が、主の語られた 40 年後、紀元後 70 年に、ローマ総督ティトゥスが来て、エルサレムを包囲し、そして神殿にはいり込み、火を付けました。その熱で流れ出て行く金箔を取るために、石を一つ一つ降ろしていったのです。イエス様の言葉がそのまま、成就しました。実を結ばないのであれば、家そのものが破壊されるのです。

2A 神の家から始まる裁き

ところで主は、世界を裁かれる時、神の家を通してご自分の御心を示されます。世に対して裁きを行なわれようとする時に、教会の中にもその悪があれば、主はまず、神の家の中にある悪を取

り除かれます。教会の中で起こっていることを見れば、実は世界に対して神が行なわれていることを、予め示しているという事もできます。「なぜなら、さばきが神の家から始まる時が来ているからです。さばきが、まず私たちから始まるのだとしたら、神の福音に従わない人たちの終わりは、どうなることでしょう。(1ペテロ 4:17)」

1B 賢い建築家

ですから、使徒たちは、自分のことを賢い建築家のように建てていると話しました。「与えられた神の恵みによって、私は賢い建築家のように、土台を据えました。(1コリント 3:10)」建物を建てる時に、何か世から試練を受けたとしても、それでも倒れることがないように、揺らぐことがないように建てている、ということです。その土台とは、イエス・キリストであるとパウロは言っていますが、いろいろな試練の中で、それでもイエス・キリストに踏みとどまることができるように、知恵を尽くして教えたということです。何をもちて知恵があるのか、賢いのかと言いますと、箴言によれば「悪を憎む」ということです。「知恵であるわたしは分別を住みかとする。そこには知識と思慮がある。主を恐れることは悪を憎むことである。わたしは高ぶりとおごりと、悪の道と、ねじれたことばを憎む。(箴言 8:13)」イエス様が言われていることに反して行なっていることがあれば、それは悪です。それを、自分が悔いることなく、自分は正しいとしている自己義認が、最も大きな悪です。聖霊によって罪が示されて、清めていただく祈りによって、賢い建築をすることができます。

2B 砂の上の家

試練にあっても、それでも立っていることのできる信仰、自分を吟味するような信仰は、杭が岩にまで達する家であるとイエス様は言われました。「ルカ 6:47-49 わたしのもとに来て、わたしのことばを聞き、それを行なう人たちがどんな人に似ているか、あなたがたに示しましょう。その人は、地面を深く掘り下げ、岩の上に土台を据えて、それから家を建てた人に似ています。洪水になり、川の水がその家に押し寄せたときも、しっかり建てられていたから、びくともしませんでした。聞いても実行しない人は、土台なしで地面に家を建てた人に似ています。川の水が押し寄せると、家は一ぺんに倒れてしまい、そのこわれ方はひどいものとなりました。」

ここでイエス様は、ご自分のことばをどれだけ注意深く、そして本気に聞いているのか？という事を問われています。イエス様の言葉を信じて聞いているのであれば、必ず行ないが伴います。イエス様との関係がそれだけ深まっているならば、イエス様の言葉にそれだけ深い信頼を寄せて、従順になれます。これは霊的成長にかかっています。そのことを、地面を深く掘り下げて、岩にまで達する土台を据えることです。イエス様ご自身に自分が立っていると言えるところまでにいるということです。イエス様とそれだけ深い関わりを持てているからこそ、聞いた時にそれをそのまま行なうという信仰になっているのです。そういう時に、洪水のような試練が来ても、流されることなく家が建っています。

3B 釣り合わぬ頸木

そして私たちの家に、世にある価値観との結びつきができてしまってやいないか、確かめないと
いけません。使徒パウロは、自分の開拓したコリントの教会の人々が、自分に対して反発している
のを知りました。それは、どこから来ているかと言えば、彼らが世にある価値観を受け入れてしま
っていて、それでパウロが指導していることで心が窮屈になっていたからです。「2コリント 6:14-16
不信者と、つり合わぬくびきをいっしょにつけてはいけません。正義と不法とに、どんなつながり
があるでしょう。光と暗やみとに、どんな交わりがあるでしょう。キリストとベリアルとに、何の調和が
あるでしょう。信者と不信者とに、何のかかわりがあるでしょう。神の宮と偶像とに、何の一致が
あるでしょう。私たちは生ける神の宮なのです。神はこう言われました。「わたしは彼らの間に住み、
また歩む。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。」この世の価値観が教会に入って
来てしまうと、本当は人を自由にするはずの神の命令が、きつくなります。そして、物事を正確に
判断できなくなります。教会はキリストのからだであり、聖霊が働かれているところであるのに、世
という色眼鏡で見ているために、それが不条理に見えたり、不公平に見えたりするのです。です
から、パウロは、そうした汚れから分離せよ、と勧めています。

4B 自己吟味

そこで私たちに必要なのは、何でしょうか？世に対して、その悪が積み上がってきたのでイエス
様が戻って来られて、世を裁く時が近づいています。教会でさえ、神は世を裁かれる前に裁かれ
ます。けれども幸いなことは、私たちは裁かれる必要はないということです。私たちは午後に、聖
餐式を行いません。その時に必要なのは、自分自身を裁くことです。「1コリント 11:27-31 したが
って、もし、ふさわしくないままパンを食べ、主の杯を飲む者があれば、主のからだと血に対して罪
を犯すこととなります。ですから、ひとりひとりが自分を吟味して、そのうえでパンを食べ、杯を飲
みなさい。みからだをわきまえないで、飲み食いするならば、その飲み食いが自分をさばくこと
になります。そのために、あなたがたの中に、弱い者や病人が多くなり、死んだ者が大ぜいいます。
しかし、もし私たちが自分をさばくなら、さばかれることはありません。」ここで言っている裁きは、
罪に定められることではありません。自分を有体に、御言葉に照らして吟味することです。そのよ
うにすれば、主が否応なしに、私たちを罪から救うために懲らしめることはなくなる、ということ
です。痛い思いをして罪から離れるか、それとも平安の心で罪から離れるかは、私たちの吟味にかか
っています。

そしてパウロがここで「相応しくない」と言っているのは、自分がきちんとできていないということ
ではありません。自分がきちんとできていないことを、気づかずに自分は正しいとしていることです。
自分は大丈夫だというのが、最も大丈夫ではありません！そうではなく、よくわきまえる、自分が
いかなるものかを、主に調べていただくことです。「詩篇 139:23-24 神よ。私を探り、私の心を知
ってください。私を調べ、私の思い煩いを知ってください。私のうちに傷のついた道があるか、ないか
を見て、私をとこしえの道に導いてください。」そして、もしそれをわきまえないで食べるなら、弱い

者や病人も出てくることさえあることをパウロは、指摘しています。反対に言えば、主に立つことによって恵みによって強められ、霊的に健康でいられるということです。同じ聖餐が、私たちを癒すことにもなるし、私たちを裁くことにもなります。主の言葉が私たちを救うことにもなるし、私たちを裁くことにもなるのと同じです。このような吟味によって、必ずや岩の上に建てる家となることができます。